

米子市
教育文化事業団
文化財報告書 10

日久美遺跡

IV



1995. 3
米子市教育文化事業団



例　　言

1. 本書は平成6年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した目久美遺跡IV
(米子市目久美町33他)にかかる報告書である。

2. 調査の組織は下記の通りである。

調査委託 米子市下水道部

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

調査担当 藤 原 裕 子(米子市教育文化事業団調査員)

調査協力 下高瑞哉(米子市教育委員会教育文化課主事)

植佐知子(教育文化事業団臨時職員)・福嶋昌子(同)

3. 出土遺物は米子市教育委員会で保管している。

4. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は米子市教育文化事業団がこれを行った。

注：目久美遺跡（1986年刊行）→目久美遺跡I

目久美遺跡（1988年刊行）→目久美遺跡II

目久美遺跡（1992年刊行）→目久美遺跡III

目　　次

例言

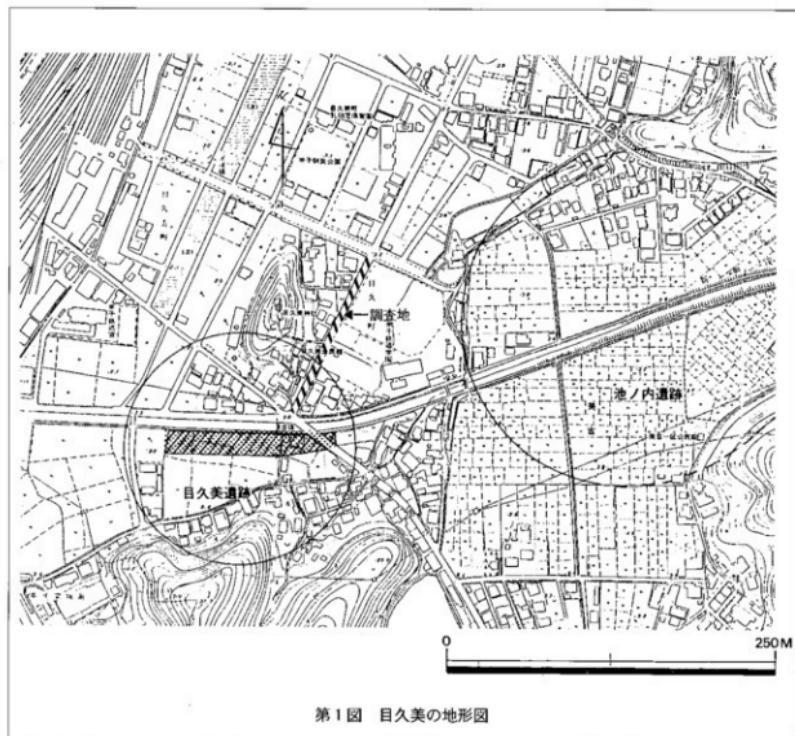
目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の概要	2
III 遺物について	10
IV 小　　結	23

I 調査に至る経緯

この調査は米子市の下水道管布設工事に伴うもので、同じような調査は昭和63年・平成4年にも隣接地で行われている。昭和57・58年の目久美遺跡調査で確認された弥生時代の水田の広がりの範囲を確認するためにも必要な調査であった。

当初全行程180mを6区画に分割して調査予定であったが、工事側との兼合いで8分割しての調査となった。アスファルト及び道路基盤となる部分は機械にて掘削した後、素掘りにて徐々に掘り下げていった。もともと下水道工事に伴う調査のため、下水管を布設する部分の幅約1~1.2m、深さ平均2.3mの小範囲の調査ということで、平面的に全体像をつかむことは困難な作業であった。



II 調査の概要

第1次調査において30mの調査部分のうち南西側15mの調査に入った。道路基盤の下約20~35cmまでは黒色粘土層は近代の耕作土で第4図I~J区間まで見られる。この地区ではこの下約1.2m以上が純粋な砂層の堆積で、弥生時代水田等安定した面は確認出来なかつた。この状況は次の調査区第2図A~B区間中央まで同じで、この地点において横木を検出した。そしてこの地点を境にこれまでになかったシルト面が現れ始める。特に遺構は確認されなかつたが、この地点がおそらく川と生活圏との境界であろうと思われる。

シルト層は非常に薄く一部では砂を挟んで下に二層になっているところもあったが、遺構の確認は出来なかつた。断面観察に於いて珪質かと思われる僅かな高まりが所々見えたが、片方の断面のみというのが大半で、珪質であるという確証はつかめなかつた。シルト層の下は再び幾層かの砂の堆積となり、間に薄く黒色粘土を喰んでいたがその厚みは約70cm有つた。シルト層を挟んで上の砂層を第一砂層、下を第二砂層とした。第二砂層の下は粘性の強い黒色粘土層の堆積になっていたが、今回調査は行わなかつた。

シルト層はやや厚くなるがこの状況は暫く続き、一部第一砂層部分において砂と粘土が細かく堆積する不安定な層が見られるが、これは後に検出される流水路の影響を受けていいると思われる。

第3図E~F区間において流水路と思われる幅約6m、深さ80cmの砂の堆積層を確認した。この付近を過ぎると、第一砂層は幾層かの細かい堆積となり、第二砂層は30~40cmと薄くなる。第二砂層の下は幾層かのマコモを含む粘土層が堆積しており、一部トレンチを刨てみたが、第二砂層下1m以上粘土層であった。

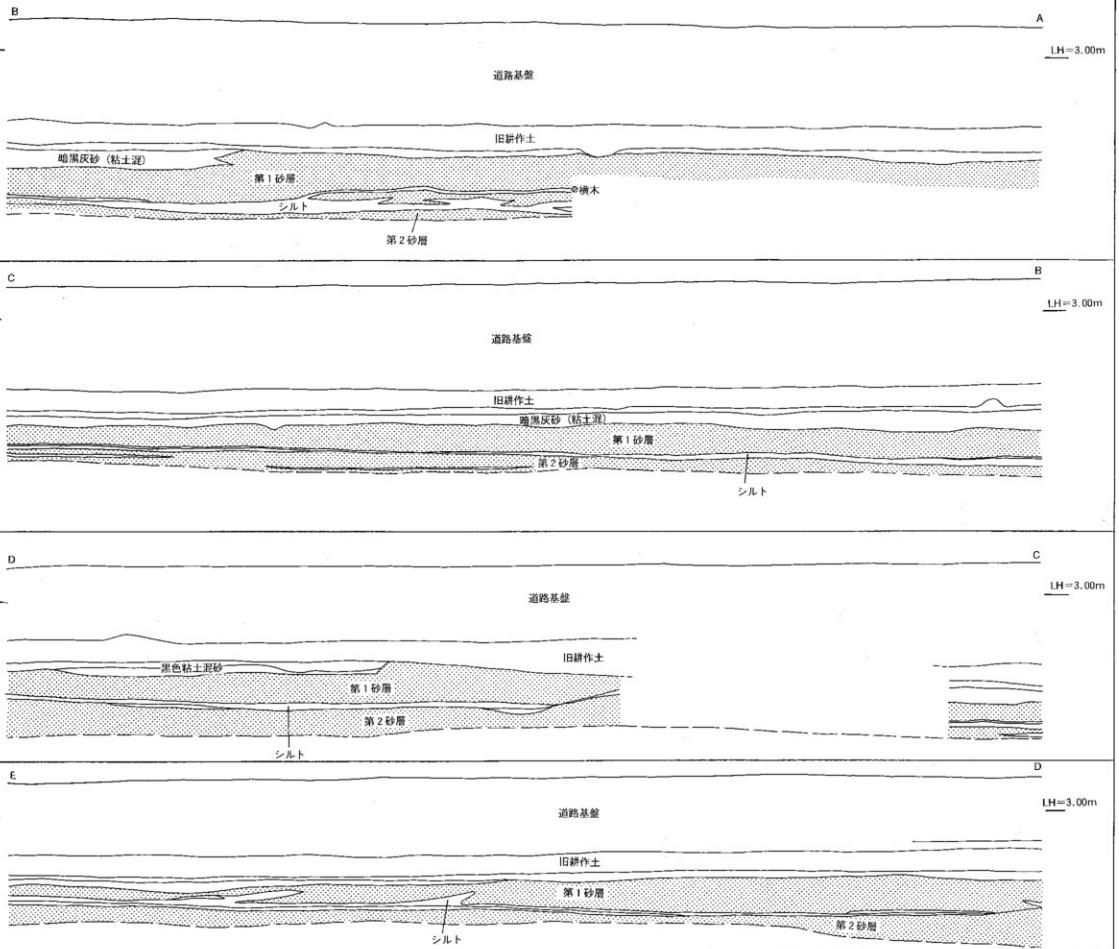
第3図G~H区間にになると砂層はわずかになり、やがて消滅する。更に最下層の暗茶黒色粘土層にかわって粘性の強くとても硬い白色ブロックを多量に含む黒色粘土層が現れる。遺構は確認出来なかつたが、多量の土器を検出した。

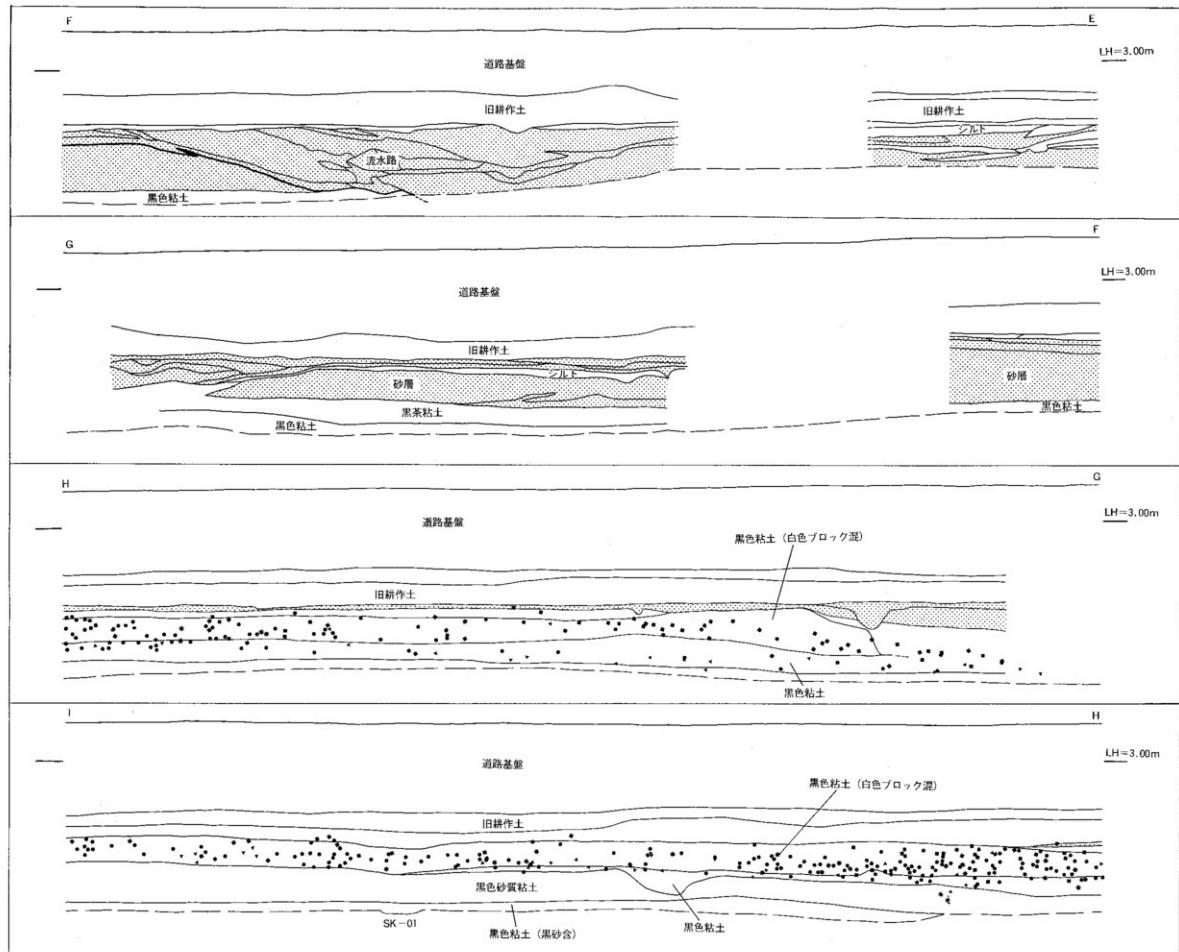
第3図H~I区間の壁際で土壌(SK-01)を検出した。平面的に恐らく半分が残つてゐたと思われ、その規模は幅80cm、深さ20cm程度のものである。土壌内部には砂が堆積していたが遺物等は検出されなかつた。

第4図I~J区間で比較的高い位置で岩盤にあたり、これは現在日久美神社のある山の稜線の繋がりである。地表面から1.5mを頂点として北東・南西方向に緩やかに傾斜をなし、地層的にもこの地点を境に変化が見られる。遺物を含んでいた黒色粘土層は、多少混入物は異なるが引き続き見られるが、その下には粘土層等ではなく岩盤と同じような黄白色系の層が堆積する。

第4図J~K区間断面においてピット痕を確認したが正確は不明である。この区間を過ぎたあたりから、黒色粘土層において遺物を含むようになる。

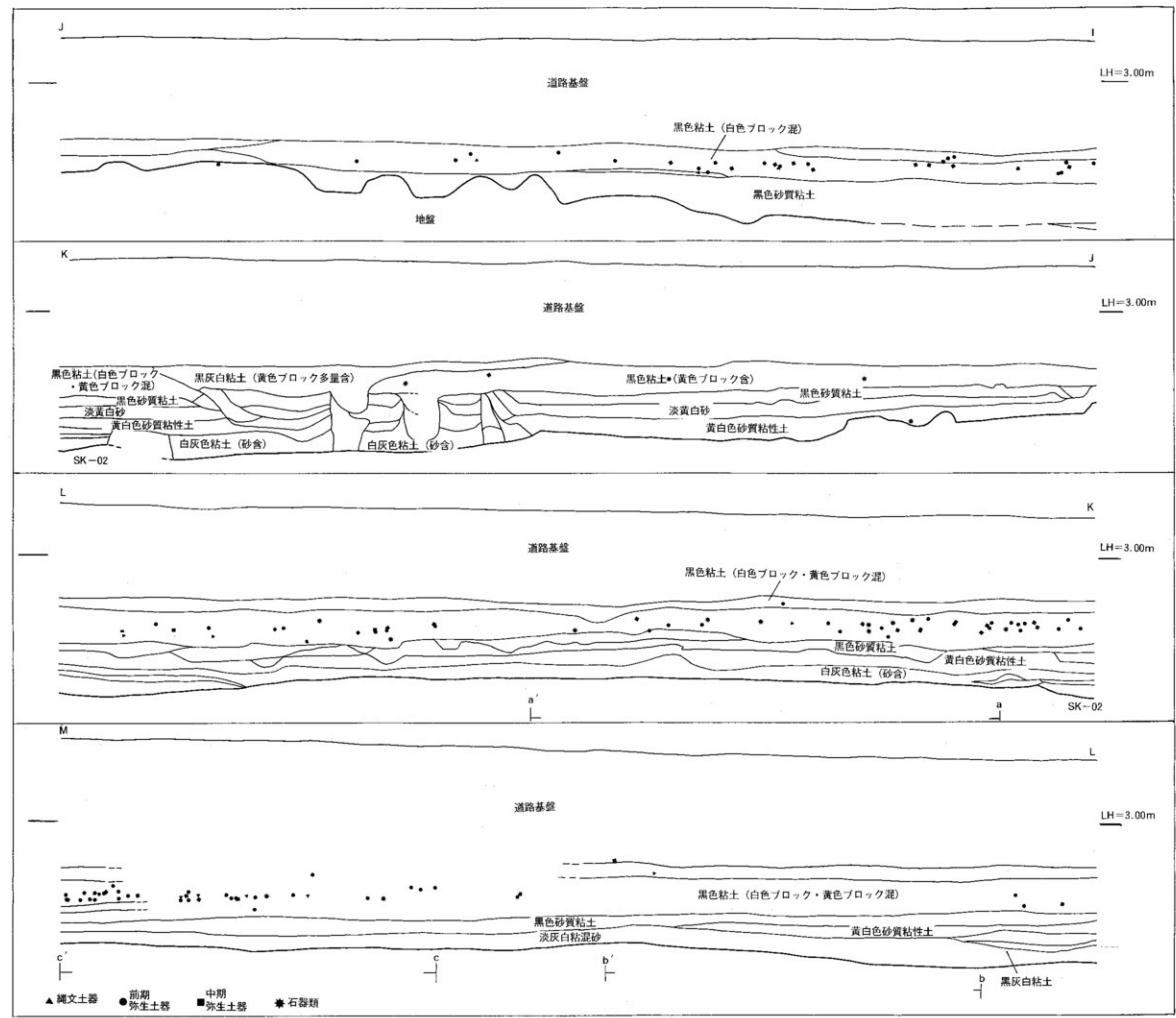
第4図K地点で一部矢板に切られているが、幅65cm、深さ22cmの楕円形土壌(SK-02)を岩盤を掘り込んだ状態で検出した。中に集石が見られ、周囲にはピット4穴を検出した。





第3図 土層断面図2





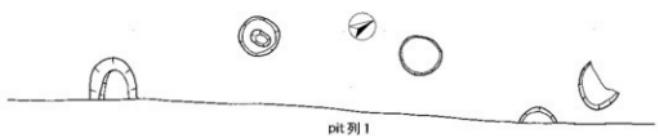
第4図 土層断面図3

N

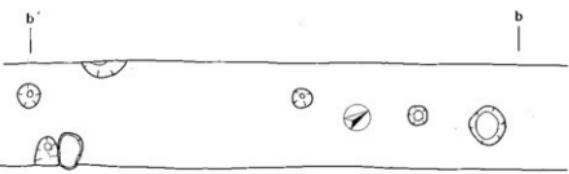
M

道路基盤

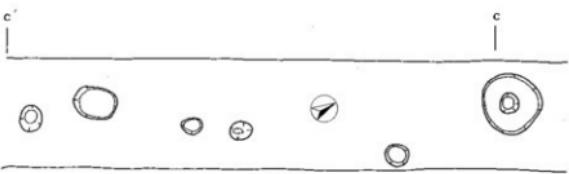
LH=3.00m



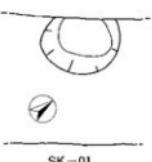
pit列1



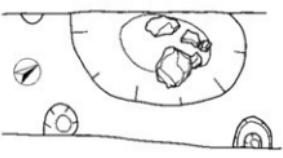
pit列2



pit列3



SK-01



SK-02

0 2 m

第5図 土層断面図4 及び平面図

石の他何も検出されなかつたためその性格は不明であるが、何らかの作業場の跡ではないだろうか。そして土壤に繞いて岩盤を掘り込んだビット列をM地点までかけて検出できた。J K区間で検出したビットとは明らかに時代は違うが、遺物もなく範囲も限られ全体像はつかめなかつた。

III 遺 物

縄文時代晚期のものから弥生時代中期にかけての遺物が多数検出された。検出状況は比較的縄文土器が下層にあるようだが混在しており、層位的に見ても同じ層から検出されていることから、流れ込んだものと思われる。

縄文土器 (第6図)

取り上げ点数152点で突帯文土器が多く出土している。いずれも縄文時代晚期のものであるが、突帯を中心に分類を試みた。まず突帯を付す位置について I類口縁端部、II類口縁を折り曲げ突帯とする、III類口縁端部よりやや下がった位置、IV類突帯の無いものとし、次に突帯の形状についてA類上下から押さえる、B類上部のみ押さえるとし、最後に刻目の有るものをa、無いものをbとした。以上のことから、I-A-aをJ 1、I-A-bをJ 2、I-B-aをJ 3、I-B-bをJ 4~7、II-B-aをJ 8、III-A-aをJ 9~15、III-A-bをJ 16~22、III-B-bをJ 23~25、IV類をJ 26~33とした。J 9は壺形土器で、J 35は浅鉢と思われ二条の沈線を施す。J 34・36は小型土器である。J 37~42は底部である。

弥生前期土器 取り上げ点数705点。

壺 (第7図) Y 1~7は緩やかに短く外反する口縁で、うちY 6・7は頸部に突帯を付す。Y 8~20は大きく外反する口縁である。Y 21・22は「く」の字にちかい口縁。Y 23・24は刻目突帯の施してあるものである。Y 25~40は底部である。

壺 (第8~11図) Y 41~48は口縁端部が平坦でややきつく外反し、うちY 47・48は刻目を施す。Y 49~59は口縁端部が平坦で緩やかに外反し、うちY 50~53は刻目を施す。Y 60・61は口縁端部を折り曲げ緩やかに外反する。Y 62~66はきつく外反する。Y 67~80はややきつく外反し、うちY 78~80は刻目を施す。Y 81~100は緩やかに外反し、うちY 97~100は刻目を施す。Y 102・103はL字に曲がる刻目のある口縁でヘラ沈線を施す。Y 101・104は緩やかに外反する刻目のある口縁で、ヘラ沈線の間に竹管文を施す。Y 106~120はヘラ沈線を施すもので、Y 106~110は口縁端部が平坦で、うちY 109・110は刻目を施す。Y 105・111~114はきつく外反し、うち113・114は刻目を施す。115・116はややきつく外反し刻目を施す。Y 117~120は緩く外反し刻目を施す。Y 121~147は底部である。

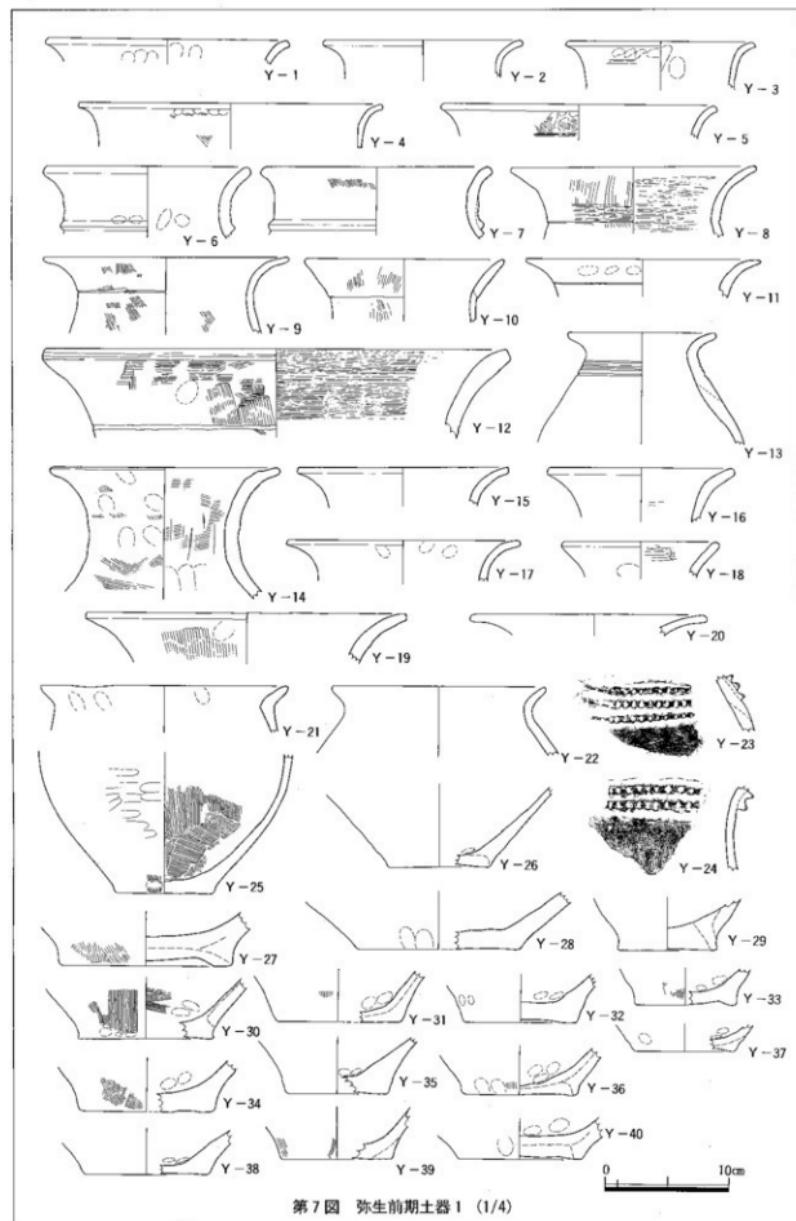
その他 (第11図) Y 149・150は鉢形土器、Y 151~155は蓋形土器である。

弥生中期土器 取り上げ点数396点。

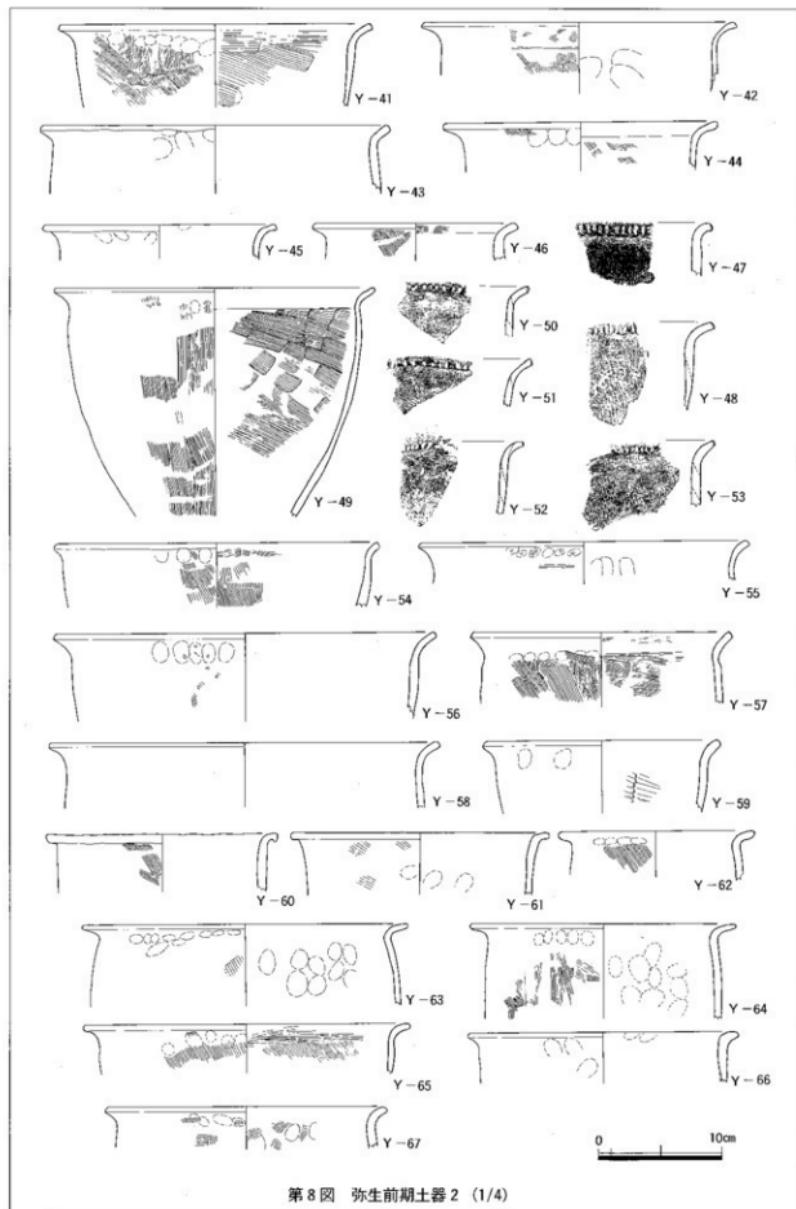
壺 (第12図) Y 156・157は外反する口縁をもつ大型のもの、Y 158は頸部から「く」の



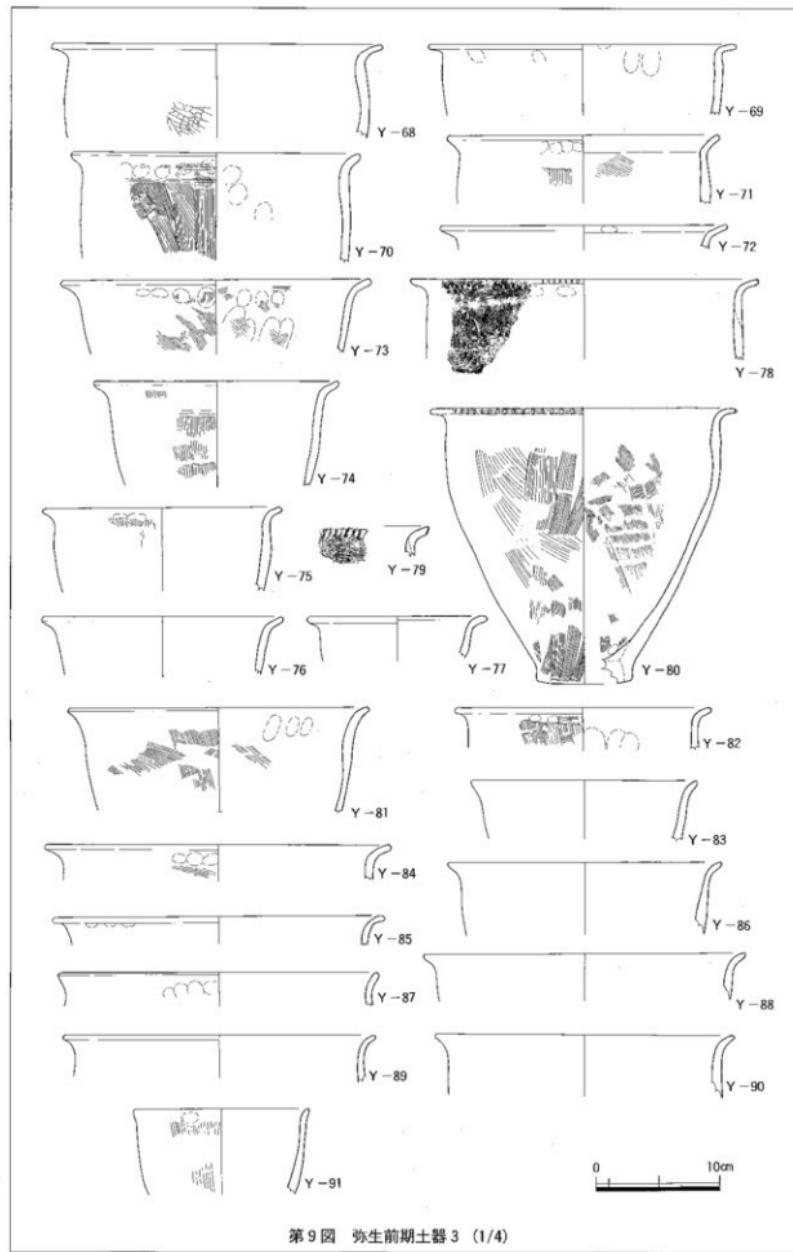
第6図 繩文土器 (1/4)



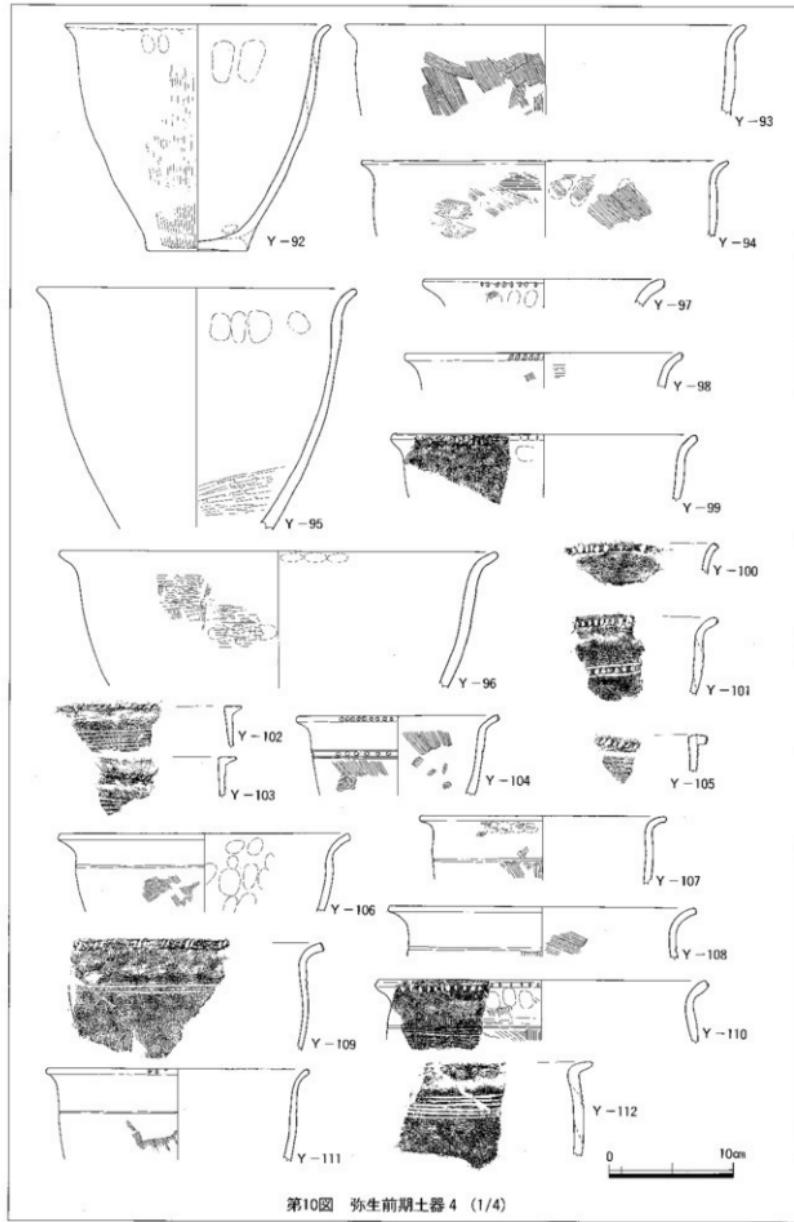
第7図 弥生前期土器 I (1/4)



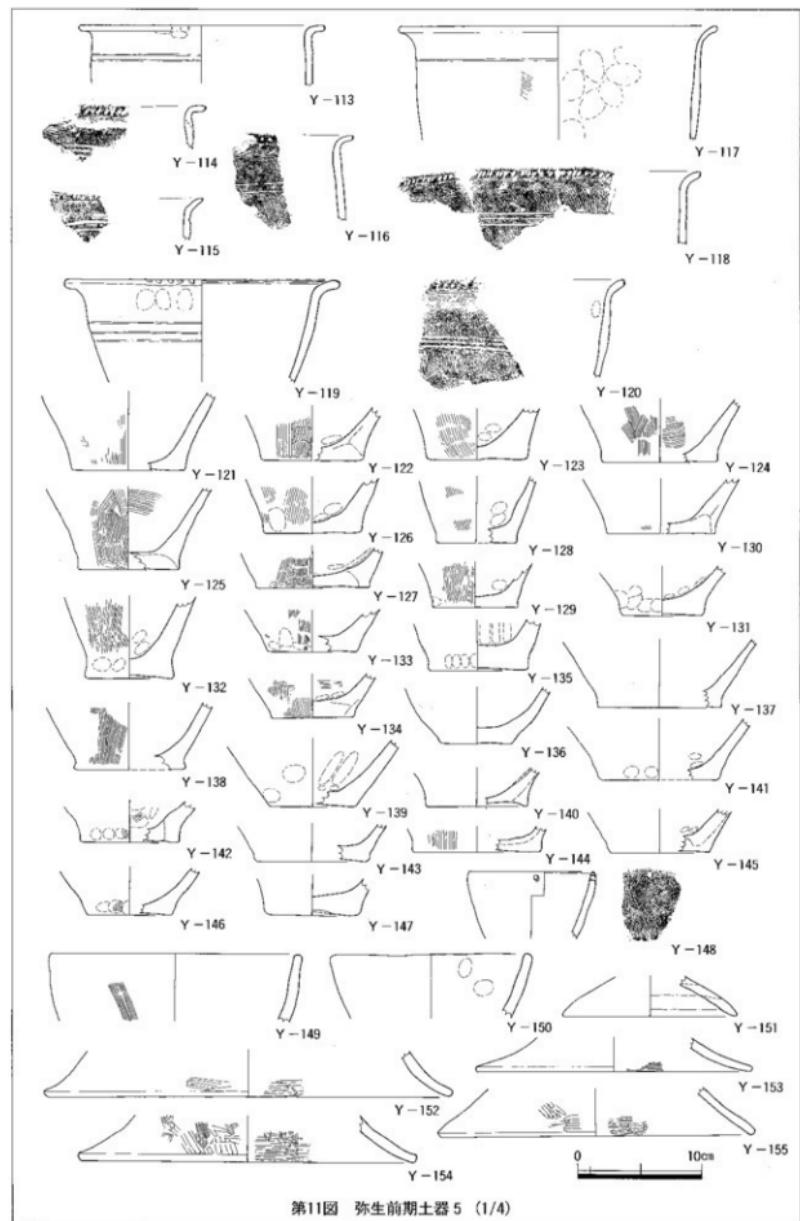
第8図 弥生前期土器2 (1/4)



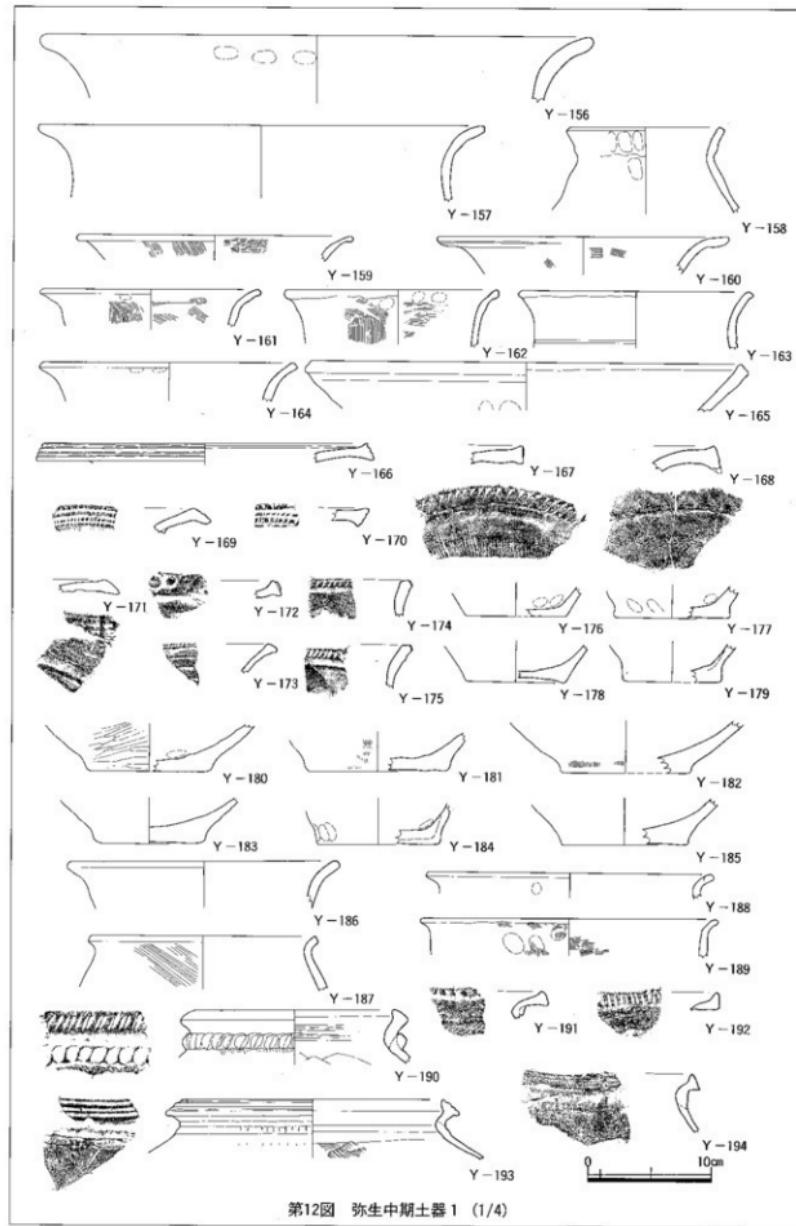
第9図 弥生前期土器3 (1/4)



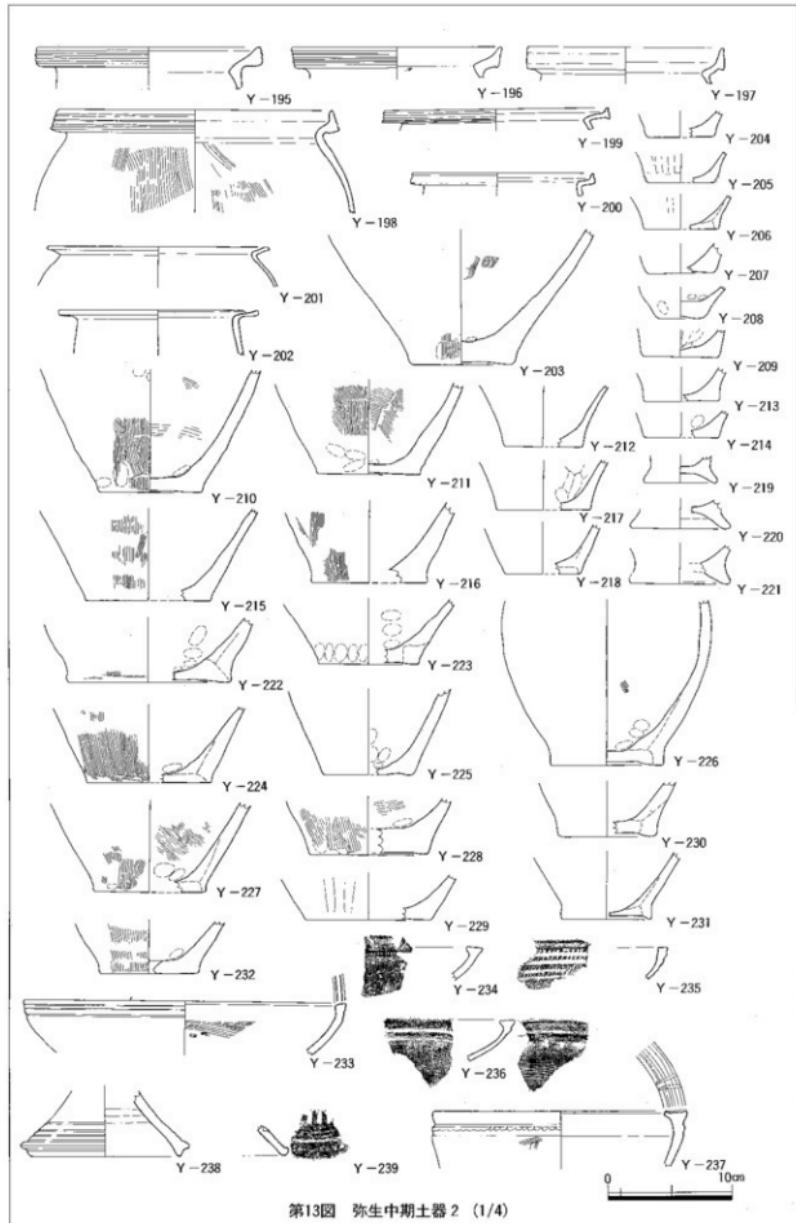
第10図 弥生前期土器 4 (1/4)



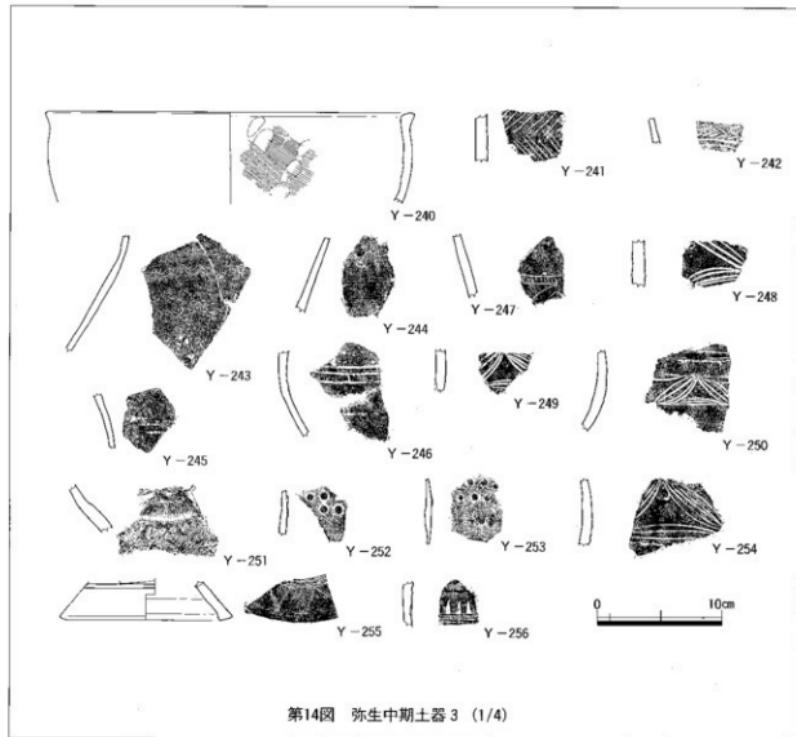
第11図 弥生前期土器 5 (1/4)



第12図 弥生中期土器 1 (1/4)



第13図 弥生中期土器2 (1/4)



第14図 弥生中期土器3 (1/4)

字に開く口縁の小型のもの、Y159・160は大きく外反する口縁で、Y161～164は外反する口縁でうちY163・164は端部が平坦である。Y165は外傾して端部が平坦で、Y166～173は大きく外反するもので、Y166～168・170・172は上下に口唇を拡張したもので、Y169・171・173は下方に拡張されたものである。Y174・175は外反する口縁である。Y176～185は底部である。

壺（第12・13図）Y186～189は前期の形態の残る緩やかに外反する口縁のもので、うちY189以外は端部が平坦である。Y190～194は「く」の字に外反し、口唇部を拡張しそこにY190は貝殻圧痕文、Y191・192はヘラ状圧痕文、Y193・194は沈線をそれぞれ施す。頸部には指頭圧痕文凸帯を貼付ける。Y195～200は「く」の字に外反し、口唇を拡張する口縁でY197・199は上下に僅かに拡張する。口唇部には沈線を施す。Y201・202は「く」の字に屈曲する口縁でかなり器壁が薄い。Y203～233は底部で、Y219～221は高台状、Y226・230・231はやや上げ底状、Y232は底中央部に穴の開いたものである。

高坏（第13図）Y233～237は皿状の坏部、Y238・239は脚部である。

鉢 (第14図Y240) 口唇部がやや肥厚し、丸鉢状を呈する。

紋様土器 (第14図) Y241・242は櫛描文、Y243・244はヘラ沈線の間に波状文、Y245・246は竹管文、Y247~250・254は木葉文、Y252・253は円形浮文、Y255・256は脚部でヘラによる紋様をそれぞれ施している。

須恵器・陶磁器 須恵器の取り上げ点数102点程度、陶磁器20点程度あったがいずれも破片であった。

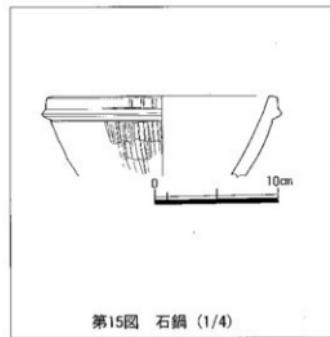
石 器

黒耀石109点を検出しそのうち鐵は7点あった。その他石鉄9点・石錘8点・土錘14点・石斧8点・石鎌1点・砥石1点等を検出した。

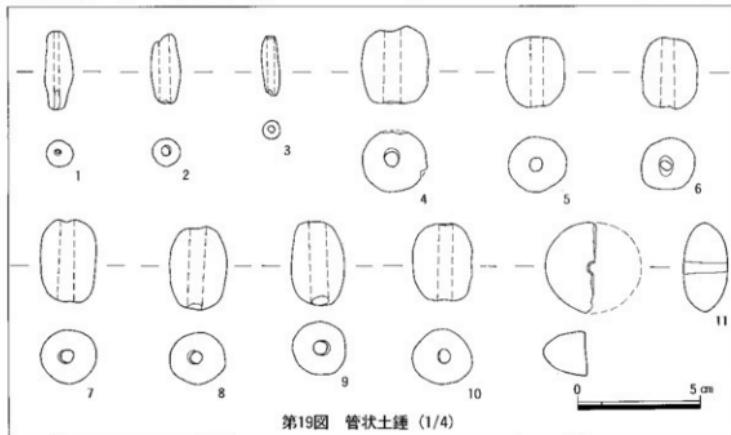
石 鐵 (第16図) 従来打製石斧と呼ばれていたもので、基端が刃部側が幅広く長台形を成す撥形でS-1・2・3は縄文時代、S-4・5・6・7は弥生時代前期のものと考えられる。

蛤刃石斧 (第16図) 完形品は少ないが、小型なS-11を除く他はすべて中型と思われる。断面形は梢円で、側縁はほぼ平行か (S-8・9)、刃部がやや広がる長台形を (S-10) 成し、弥生時代中期のものと考えられる。

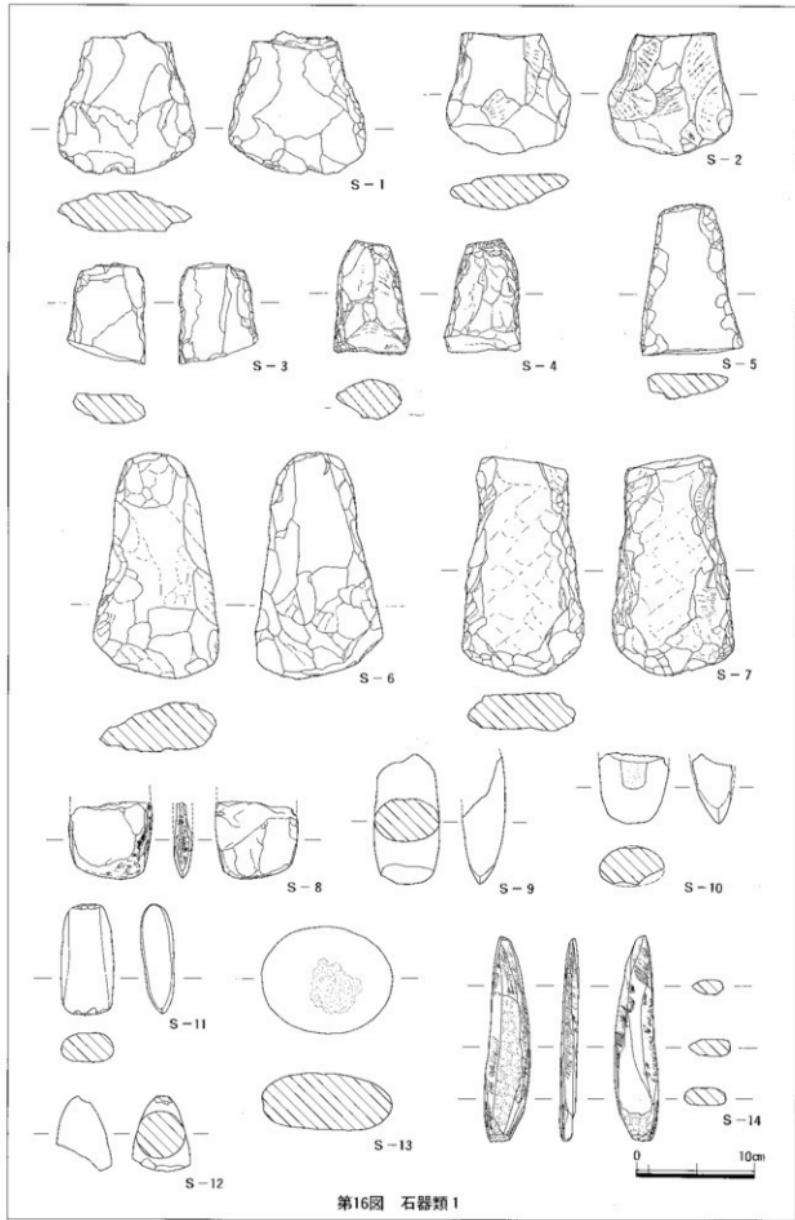
石 鎌 (第16図S-14) 長さ17cm・幅3.5cm・厚み1.4cmの内弯する磨製石鎌である。弥生時代前期のものと考えられる。



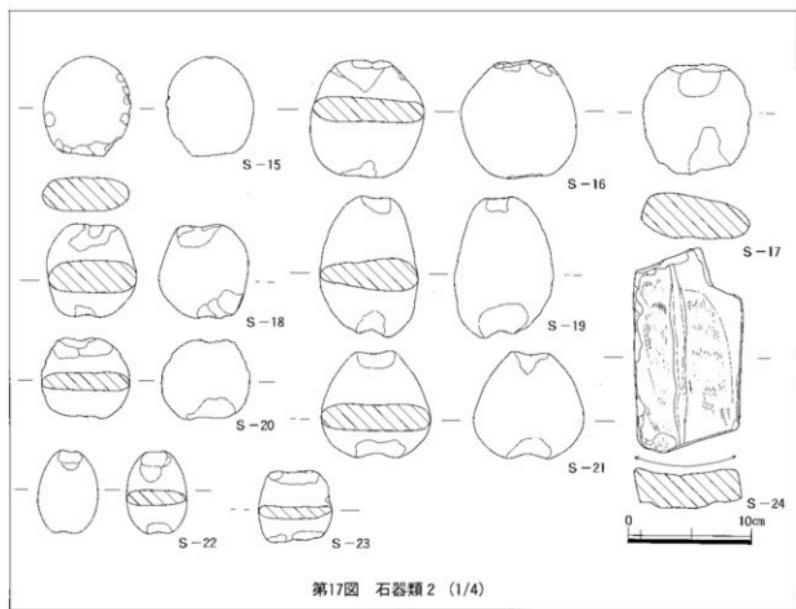
第15図 石鉋 (1/4)



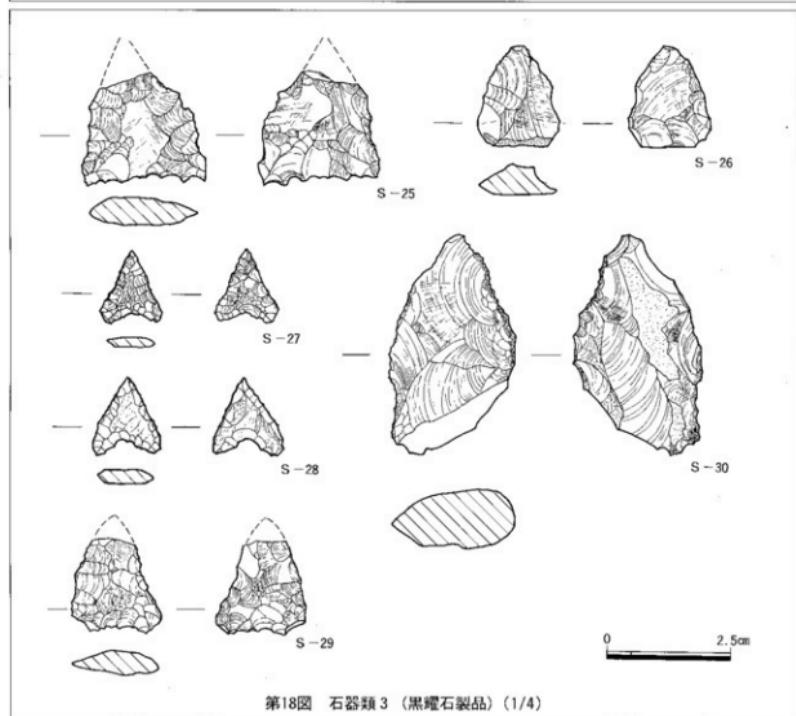
第19図 管状土錘 (1/4)



第16図 石器類1



第17図 石器類2 (1/4)



第18図 石器類3 (黒耀石製品) (1/4)

石 鐵 (第18図) 未完製品
が多いが、完成品は黒耀石の小型
凹基式および平基式である。

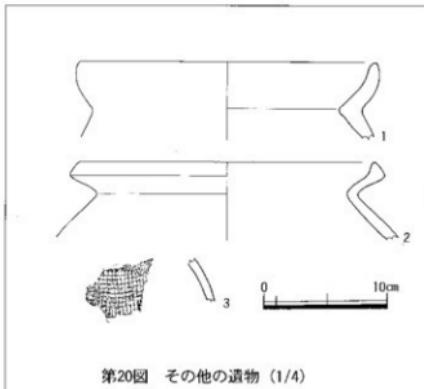
そ の 他 (第16・17図) 敲石
S-12・凹石 S-13・砥石 S-24

切目石錐 (第17図) 長軸 6 cm
~ 9 cm、短軸 7 cm ~ 9 cm、厚さ 1
cm ~ 3 cm の梢円形の偏平なもので
ある。

石 鍋 (第15図) 径 17.2 cm。
残存高 6.5 cm のもので、口縁端部
はたいらで、外反する口縁部であ
る。三角形に近い鍔をもつ共伴遺
物が無いため正確な時期はわからないが、形態から見て鎌倉・室町時代頃のものと考え
られる。

管状土錐 (第19図) 形は細身と寸胴の二種類ある。正確な時期は不明であるが、弥生時
代のものが多いと思われる。

その他の遺物 (第20図) 中世のものと思われるの甕の口縁部 2 点 (1・2)、韓式土器と
思われる破片 (3) を検出した。



第20図 その他の遺物 (1/4)

IV 小 結

今回の調査も前回と同じく狭く限られた範囲での調査ではあったが、新たに流水路の跡
やピット・土壤も検出された。しかし一部分の調査のためこれらがどの様な意味をもつも
のか全体像がつかめないことが残念である。土の鑑定結果がでていないため断定はできな
いが、今回の調査ではいわゆる目久美遺跡に続く水田の広がりの痕跡は検出されなかつた
ようである。このことで水田の範囲が北方向にはほぼ確定されたと思われる。今後西方向
にどれだけの範囲で広がっていき、目久美神社を越えて北方向にどのような遺跡の広がり
が見られるのかが、今後の課題になるであろう。

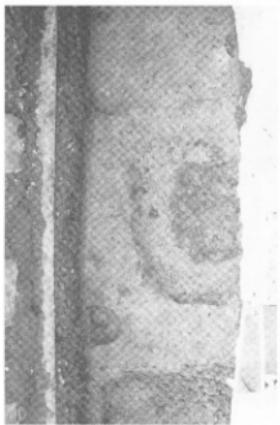
図 版

图版 1

E-F剖面
流水路土层断面



SK-02
先端状况



ヒツト列3



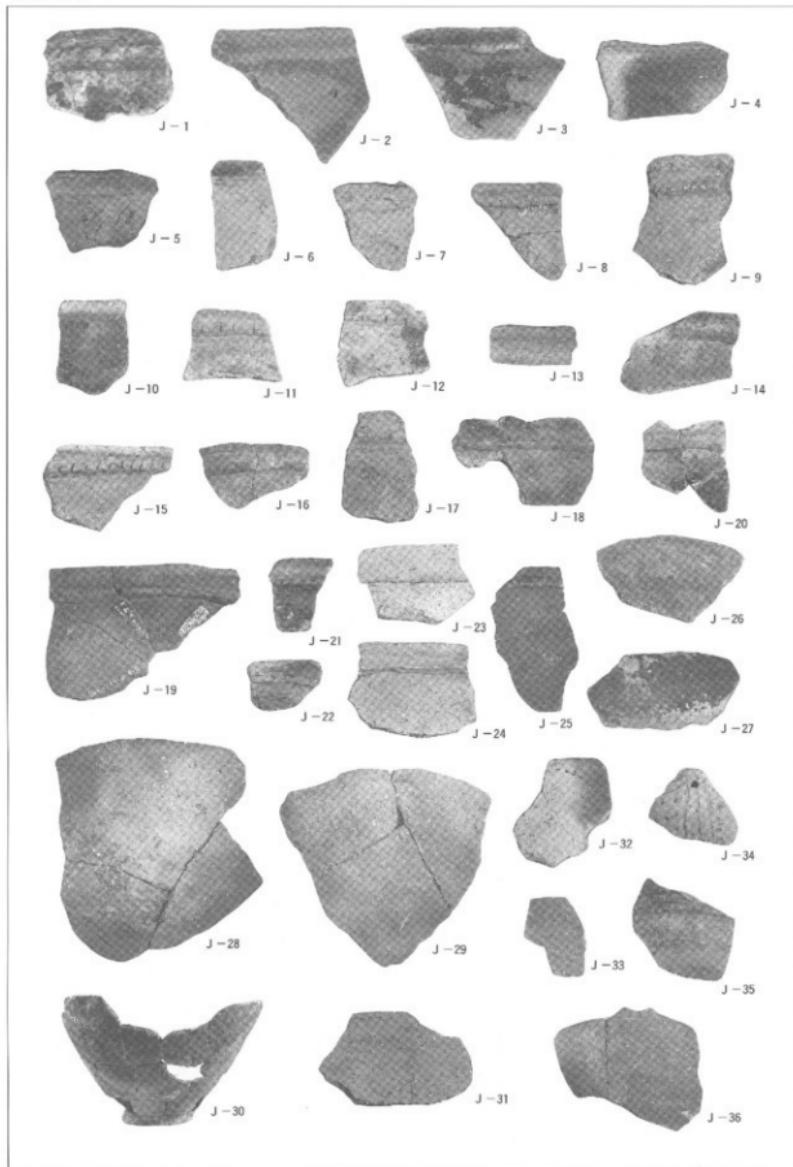
ヒツト列1



SK-02
石検出状況

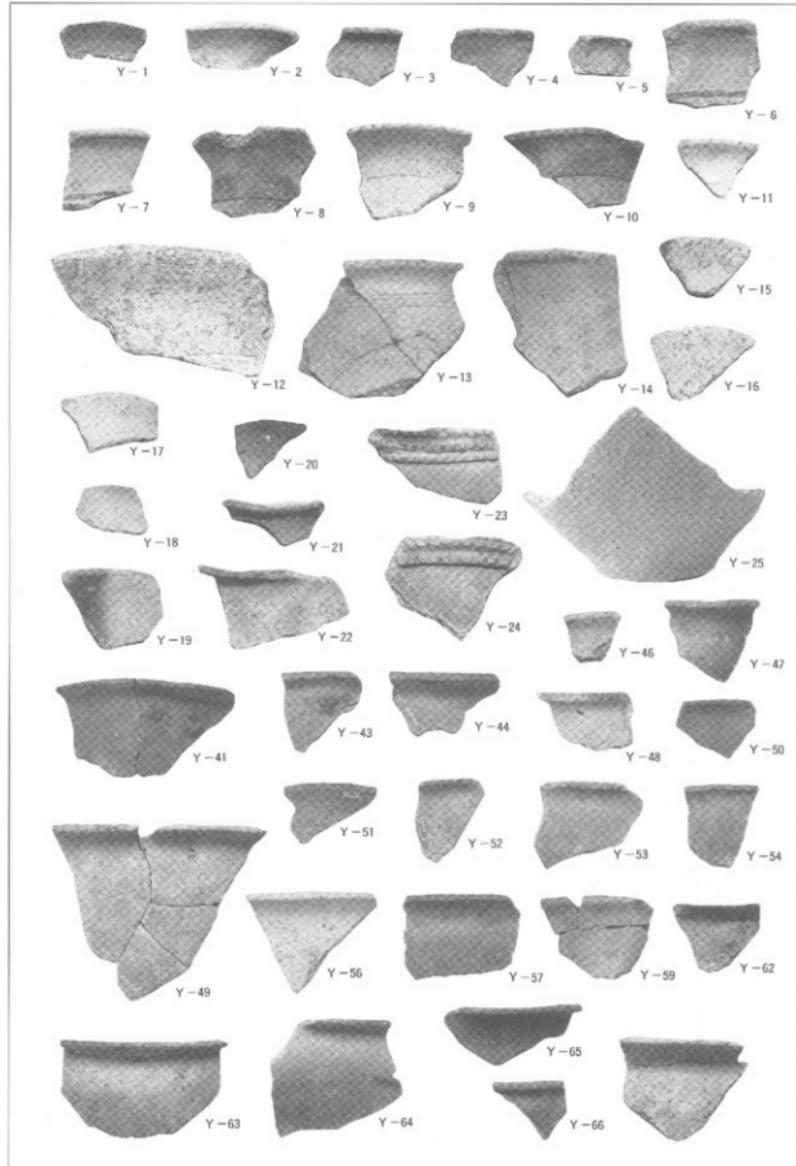


図版2



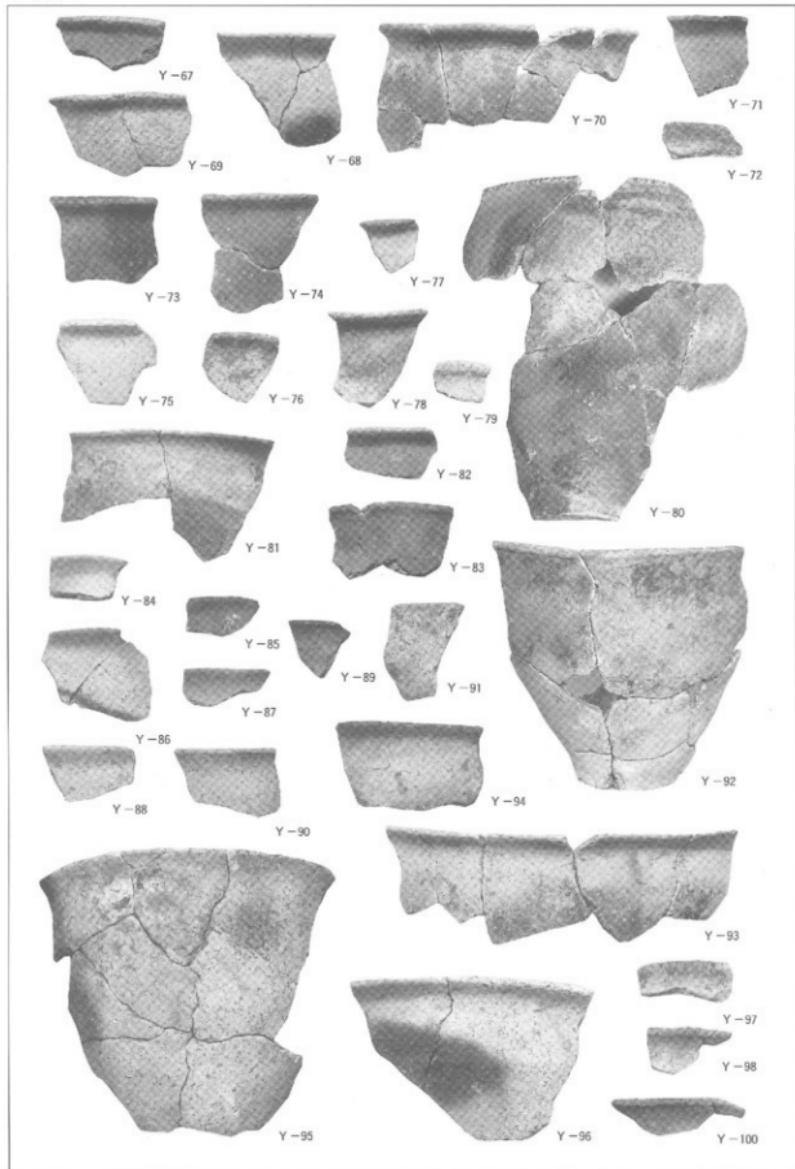
縄文土器

図版3



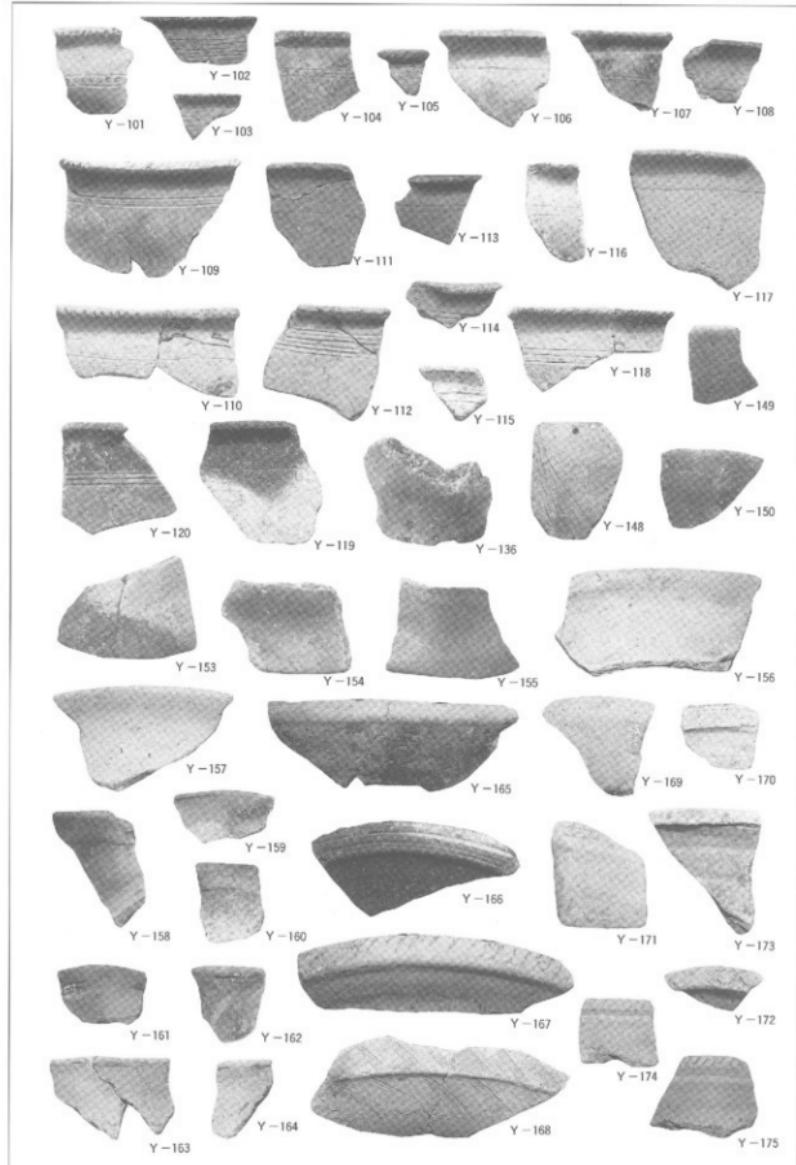
弥生土器 1

図版4



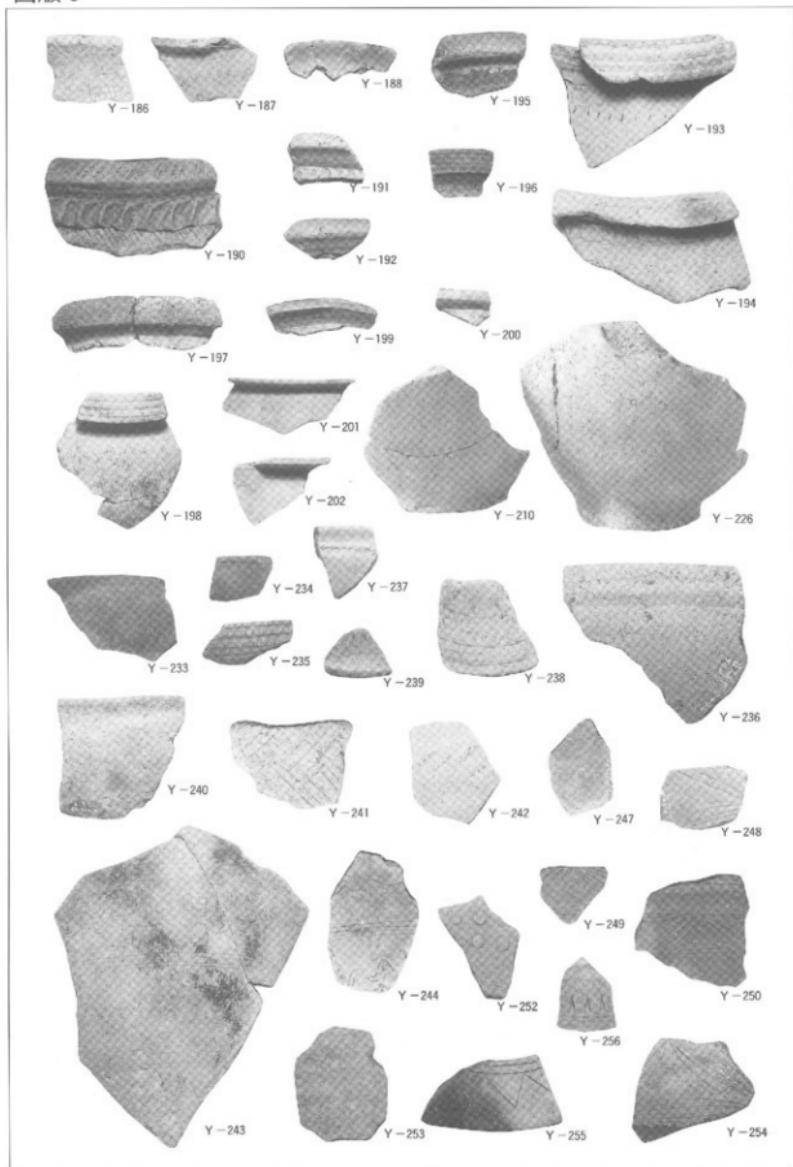
弥生土器 2

図版5



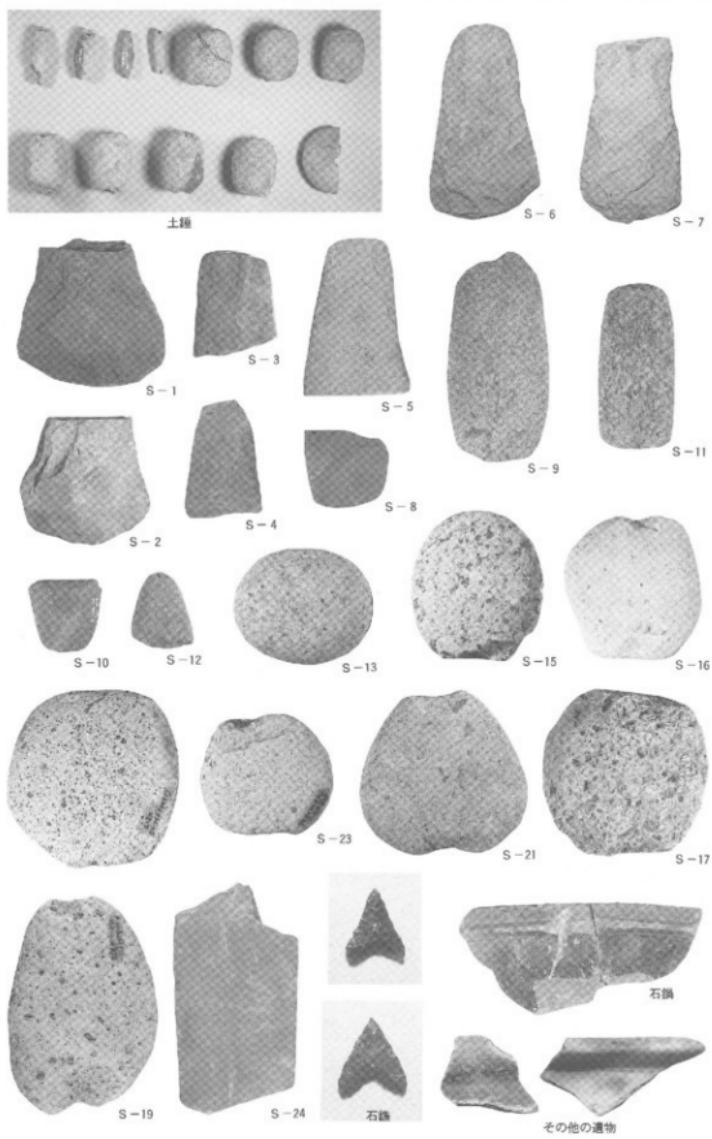
弥生土器 3

図版 6



弥生土器 4

図版 7



土錘・石器類・その他の遺物

米子市教育文化事業団文化財報告書10

目久美遺跡 IV

1995年3月

編集発行 米子市教育文化事業団

〒683 島根県米子市中町20

0859-22-7109

印刷製本 (株)米子プリント社